

特集 三井嘉都夫先生の思い出，座談会 三井 嘉都夫先生を偲んで

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY

(巻 / Volume)

44

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

98

(発行年 / Year)

2012-03-22

＝ 特集 ＝

「三井嘉都夫先生の思い出」執筆者一覧

(掲載順)

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 村上 直 | (法政大学名誉教授) |
| 伊藤 玄三 | (法政大学名誉教授) |
| 小鷹 俊彦 | (元・法政大学職員) |
| 五明 公男 | (法政大学スポーツ健康学部教授) |
| 桑原 正見 | (元・武蔵野女子学院教諭) |
| 岡永亮八郎 | (元・法政大学地理学会副会長) |
| 塩谷 博 | (元・東京都職員) |
| 清水 靖夫 | (元・立教高等学校教諭, 元・法政大学地理学会会長) |
| 内藤 次郎 | (1980年度学部卒・早稲田実業高等学校兼任講師) |
| 飯田 貞夫 | (茨城キリスト教大学名誉教授, 前・法政大学地理学会会長) |
| 宮垣津 繁 | (元・法政大学通信教育部指導講師) |
| 宮岡 邦任 | (1990年度学部卒, 現・三重大学准教授) |

三井嘉都夫先生の思い出

村上 直

(法政大学名誉教授)

法政大学の戦後の歴史と共に歩んでこられた方は三井嘉都夫先生であろう。その三井先生が、お亡くなりになったことを知ったのは、かなり後になってからである。私は法政大学に在職20余年間、とくに先生には親しくしていただき、数多くの思い出を忘れることができない。

私は1971年(昭和46年)、大学紛争や「助手問題」などで混乱しているとき、文学部の学科の改革や充実を進めるため、非常勤講師から専任教員に就任したのであるが、当時、三井先生はすでに地理学科の教授として、大学院議長の要職に就かっていた。もともと地理学科と史学科は、創設以来、親しい関係にあったが、とくに温厚な三井先生に敬意をはらうようになった。それは、何かとお話をする機会が多くあったからかも知れない。

やがて先生は1973年、選挙によって文学部長に就任されたが、突然、翌年になって私は先生のご指名で教授会主任となり、文学部長を補佐することになったのである。専任教員となって3年目のことであり不安はあったけれども、先生のもとで教授会の運営に携われることになったのである。この年度は、学費値上げ反対や総長団交などもあり、紛争が続いており、しかも、先生はこの頃から硬式野球部の部長も務められるようになったと記憶している。ご多忙な先生の代理として、私もときには学部長会議に出席したこともあり、大学の現状なども詳しく知ることができたように思う。

三井先生は、自然地理学の「陸水学」がご専門であり、私は日本の「近代史」であったことから、学界では一緒に活動することはなかったが、他の大学の教員からは、よく先生のことを尋ねられる

こともあり、学際的なご活躍の一端を知ることができた。その後、1981年には、法政大学の理事(のちに常任理事)も務められ、大学全体の運営に携わるようになった。私も後に文学部長に就いたこともあり、大学の評議員会などで同席することもあった。そのたびに、理事として、ご多忙な日程とご活躍の様子を知ることができた。

三井先生との思い出で、忘れることができないのは、1987年の「史学科・地理学科創立五十周年記念」の式典と記念誌の刊行についてである。この計画は実行委員長の三井先生の発案で計画され、私も副委員長として、地理学科と史学科の教員や大学院生・卒業生(一部)が参加しての事業であった。その年の11月21日(土)には記念式典が、赤坂プリンスホテル別館のロイヤルホールで盛大に行なわれている。

このとき、作成された『法政大学史学科・地理学科の半世紀』や『卒業生名簿』には、地理学科と史学科の歴史の歩みと共に貴重な写真や記録・資料が収録されており、先生の熱意とご尽力によって実現したものと、今でも感謝している。

法政大学の定年退職後は、三井先生とお会いすることが少なくなってしまった。しかし、10年前、法政大学文学部同窓会が設立された時や、先生が初代の同窓会会長になられてから、毎年行なわれる総会の時にお会いするようになった。お元気なお姿を拝見して、短い会話を交すだけであったが、次の再会を約束することもあった。

突然の訃報に接し残念でならない。今でも大学の会議や行事、そして紛争のとき、ご一緒に行動した当時のことを忘れることはできない。とくに先生から『招待証』をいただき、東京六大学野球をネット裏や三塁側から、法政大学の応援をしたことなど懐かしい思い出もある。

改めて、敬愛する三井嘉都夫先生のご冥福をお祈りいたします。

三井嘉都夫先生の思い出

伊藤 玄三

(法政大学名誉教授)

三井先生と最初にお会いしたのは、58年館2階の教授室前の廊下であった。私は昭和49年4月に法政大学文学部に赴任することとなり、史学科の豊田武先生の紹介で当時文学部長であった三井先生に御挨拶することになったのであった。廊下での挨拶とあわただしいことではあったが、なかなかエネルギーな話しぶりとお姿であったのが印象的であった。その後、史学科と地理学科の研究室が隣り合っていたこともあって、また教授会の着席場所も良く隣り合っていたことなどがあり、親しく話しかけられたりした。話題は時に資源研の事などもあったように覚えている。

その後、先生は理事など大学の要職に就かれご多忙であられ、通りがかりに御挨拶をする程度であったが、先生との決定的なおつきあいは「中国新疆タクラマカン砂漠調査」の時であった。この調査では1991-1992年の夏、2度にわたって砂漠行にお伴させていただいた。この日中合同タクラマカン砂漠調査では当初、中国科学院の中国科学探検協会から日本山岳会へ打診されたものであったが、その頃の事情は私は仄聞する程度である。私がこの計画に参加することになったのは、数回の実行委員会の後、これを学術調査として実施すると決定した段階からであり、考古学分野も参加を慫慂されたのを好機として同行させていただいた。私事ながら、既に中国へは東アジア史学会で吉林省へ、また新石器文化遺跡を訪ねて山東省への調査団に参加していた経験もあったので、それ程違和感なく出掛けることにした。しかし、参加と殆ど同時に地理学と考古学のメンバーにワンダーフォーゲル部員が中心となって諸準備にかかり、中国側と折衝をくりかえしていく過程には相当な苦労があったと思う。三井先生や小寺浩二実

験助手(当時)を中心に募金を始め、大きなプロジェクトに仕上げた学生諸君の活動は見事だった。私は三井先生の下に実行委員会を、また中国側との折衝に毎回のようにお伴して北京へと、全体的に参加していったが、それ程お役に立てなかったのでは無いかと忸怩たるものがある。

砂漠調査中は、三井先生は比較のお元気であり、例の如く活発に動きまわられ、学生達に観察・測定を指示されていた。ただ一度、先生が自動車ドアの開閉の時に指を挟まれ、「痛い!」と大声をあげられたことがある。急なことゆえ薬も間に合わないで、ザックの中からブランデーをつけてさしあげたが効果の程はわからない。その後どうされたか聞く機会がない。

ホータン河左岸に小休止をした時に、水際に黒色の長いものが見えた。蛇と判断して大声をあげたら、三井先生がドタドタと来たのでたちまちそれが消えてしまった。仕方なく一人で岸辺にいたら、例の蛇が水際にスッと頭をもたげた。「蛇です」と叫んだら、また先生がドタドタと背後に来たので、素速く蛇は消えてしまった。三度目には少し上流の岸辺にその蛇があらわれたが、私が立ち上ったらパッと水中に飛び込んだ。先生には遂に蛇を見ていただけなかった。私は狼少年では無いのに、残念至極な事であった。それにしても、あの蛇の動きは「沙悟浄」の世界かと思われた。

調査後、帰国されてから三井先生は一度入院されたとお聞きしたことがあったが、今年3月末にOBの大関保さんから先生が入院中であるとの電話があった。ちょうど順天堂練馬病院に私も通院中であつたのでお訪ねしたら、偶然、看護師受付で車椅子に乗った先生が手当中であつた。その時は個室に戻られてお話をされた。しかし、2度目にうかがった時は病室も変わられ、治療中の為かおられず、看護師は「プライバシーですので」と言って病状も聞くことが出来なかった。

再度、大関さんからの電話があつた時は御逝去との事。もうお会いすることが出来ず残念である。

追憶

小鷹 俊彦

(元・法政大学職員)

三井嘉都夫先生先生の思い出として、私が1951年法政大学に就職して以来、60年間に及んだ数々を述べさせていただきます。

三井先生の教育・研究活動は、1950年地理学科卒業後、研究助手、講師、助教授、教授、名誉教授(1992年)の半世紀にわたって続いています。また他大学の講師、学会(水文・水資源学会、日本陸水学会)などを含め、学外での活動は、法政大学タクラマカン砂漠探検調査総隊長(1991～1992年)ほか、地元、練馬区緑化委員会会長などがあります。

三井先生の講師時代に、私は学務部(夜間)で、文学部係担当となり、当時は全学部で学課制度委員会、カリキュラム検討委員会を開催され、制度や科目名の改変などが行なわれました。三井先生の担当科目は「海洋・陸水・土壌」、「自然地理学演習」、「実験・実習」となりました。

新制地理学科では自然地理学系(三井先生)と人文地理学系(鴨澤先生)とが、基盤になったこと、全学部の教員免許業務を文学部が担当したこと、地理学科で「理科」の免許が取得できること、理科の主要科目は実験・実習を必要とすることなどが記憶にあります。

旧制地理学科の科目で実験・実習が行なわれたか否かの調査に、国土地理院(世田谷の池尻)へ三井先生に同行したことなどがあります。

三井先生が大学常務理事(施設担当)になられたとき、川崎第二グランド土地売却の問題が起こり、(土地の売却先)国土利用計画法、川崎市公有地拡大に関する法の手続にて、川崎市に売却決定

となったこと。

三井先生が野球部長(第10代目)に就かれて、1974～1992年間に歴任され、藤田元部長に次ぐ2番目の長き実績となったこと。

野球部合宿所の建設には大変にご苦労され、資金調達のために大学財務担当理事へ借入をお願いしたところ、銀行を紹介することで終わり、野球部で独自に銀行から借入し、三井部長の居宅を担保にして、抵当権設定をしたこと、野球部の活動について大変熱心であったことが長期の部長歴に示されていること、部長退任後は神宮球場バックネット裏の指定席で観戦されていた様子が見うけられ、三井先生に法政OBや、野球関係者の方々がご挨拶されていたこと、このような光景を今は見る事が出来ず残念です。

先生には法政大学校友会練馬支部の顧問をお願いし、支部活動のご支援いただいたこと、支部総会には必ずご出席いただき、また三井先生と卒業同年の地理科OB・塩谷博様は支部の監査、練馬区役所監査役、卒業同期の地理科OB・飯塚芳男様とで、三井先生を囲み、若い頃の話、地理学科の思い出話は支部総会での一つの楽しみでもありました。

ご逝去をいたみ、合掌。



平林総長(当時)と三井先生(右)

法政大学野球部・三井嘉都夫部長との4年間

五明 公男

(法政大学スポーツ健康学部教授)

(1) 三井先生との出会い

三井先生が伝統ある法政大学野球部の第10代目・部長に就任されたのは、昭和49年(1974年)でした。私が監督に指名されたのはそれより3年前の昭和46年(1971年)で、弱冠27歳でありました。偉大な名将・松永怜一監督よりチームを託された私は、それまで指導者としての実績もなく、大学野球部の監督として3年間もがき苦しんでいました。

そんな状況の中、三井先生と私は部長⇔監督としてのコンビを組む事になったが、失礼ながらそれまで私は先生とは一度も学内で会ったことも事もなく、話をした事もなかった。しかし、お会いして先生の物事に対する精力的な行動、学問・教育に対する真摯な態度、他人に対しての明るい態度・温かい対応等、どれを取っても学者としての品位が感じられた。先生が就任される前の3年間は、「強くなければならない法政野球部の監督」という十字架を背負い、新米監督であった私は勉強不足もあり選手育成法にも悩み、迷いも生じていた。

(2) 先生から教えて頂いたこと

先生は野球部の部長を引き受けるあたり、「監督・五明公男氏が風邪でもひいて休んだらノックなどは部長がやるのかな？これへの心配、胸の痛む思い、今思えば恥ずかしい。」(創部80周年部史への寄稿文から)とも書いている。部長就任当時、野球の現場、野球をまったく知らなかった先生ではあったが、試合中ベンチでは一人のファン以上に無我夢中で声が枯れる程、選手に声援・応援をし、勝ったら「明日も頑張ってください」、負けたら「明日、頑張ってください」と元気に明るく私に毎試合激励の言葉を掛けて下さった。

先生から身を持って教えて頂いた「物事に対するバイタリティー溢れる行動」「教育に対する真摯な態度」「人に対する明るい態度・温かい対応」

「勝負に対する良き勝者(GOOD WINNER)良き敗者(GOOD LOSER)」等の教えは監督として指導法に迷っていた私に大きな転機を与えてくれた。この事はその後の監督、体育教員としての血となり、肉となり私の心に強く残っている。

(3) 江川卓(元巨人)、金光興二(現野球部監督)ら「花の49年組」と同期

三井先生が部長へ就任と同時に野球部にプロ注目の「花の49年組」と言われた逸材高校生が大量に入部してきた。「怪物」と言われた江川卓、前年夏甲子園大会で「全国制覇」した広島商から金光興二(現野球部監督)、同「準優勝」の静岡高から植松精一、箕島高から島本啓次郎、静岡自動車工から袴田英利らスターが勢ぞろい。マスコミは「法政8連覇間違いなし」と囃し立て、「もし連覇出来ない時は、五明監督の責任である」と、またもや勝って当たり前の指揮官のレッテルを貼られた。しかし、この時もこの重爆から救ってくれたのも、三井先生の「やるだけの事をやれば結果はついてくる、あまり最初から結果は気にしない方がいいですよ。あなたのやり方で江川君らを指導すれば良いのではないですか。結果が悪ければ、私と浦先輩理事(野球部OB最高責任者)、藤田先生(法政大学名誉教授・法政大学野球部の父・野球部初優勝監督)が責任取りますから」と激励され、苦労もあったが三井先生とのコンビで「花も嵐も踏み越えて」の4年間が始まった。本当にこの言葉は私のプレッシャーを跳ね除けてくれた。

(4) 東京六大学野球史上初の「完全4連覇」

マスコミ的に言えば、「8連覇間違いなし」のチームを預かった私ではあったが、この入学してきた1年生が全員最初からレギュラーになれるほど東京六大学野球は甘くなかった。江川は完全に受験勉強の為に運動不足で肥満、体調を万全な状態に戻すには夏まで待たなければならなかった。春から1年生でスタメンに登場したのは楠原外野手(広島商)のみであった(江川は体調万全ではなかったが、春「東大戦」で秋の事を考え2イニング投げさせている)。秋は江川がエースに君臨し、加えて同学年のサウスボー・中林(松江商)の活躍もあり優勝、私としては実に6シーズン振りの天

皇杯であった。しかし、「49年組」が2年生になった春・秋は島岡御大率いる明治大学に気力で負けてしまい、江川を擁して優勝できなかった監督・五明へのマスコミ、そしてファンからの批判は並大抵のものではなかった。その時も私を庇ってくれたのは三井先生であった。私への批判の嵐に対して防波堤になってくれて、「今はじっと我慢の時、来年、再来年を勝負の年と考え、五明監督思いの通りの練習、試合をして下さい」と叱咤激励された。この言葉があったればこそ、辞任もせず江川達と残り2年間、がむしゃらに練習し、4シーズン連続完全優勝の栄光に浸れたと思う。3年生になった江川や金光達は慶応、早稲田、立教、明治、東大と比べて選手の技量・素質、チーム力で抜き出していた。監督としてはこの時期、彼らに、①練習で「基本の徹底」②私生活(寮生活)で、規則正しい生活(早寝、早起き)を実行させれば4連覇出来ると心秘かに確信していた。その為、江川や金光より1学年上の高代主将(現オリックスコーチ)の学年から早朝トレーニングを始めた。試合当日以外は午前7時15分から約30分間、野球場隣の陸上競技場を走る事にした。朝早いランニングだったので夜早く寝ないと起きられない、走れない(この時の選手の体調管理には絶対必要と考えた)。私もどんなに前夜遅くとも選手と走った。これは私の意地でもあった。最初に三井先生がアドバイスしてくれた「あなたのやり方で指導すれば良いのではないか」の実践であった。この事が全てではないがこの「早朝ランニング」がなければ4連覇はなかったのだないかと思う。昭和52年(1997年)秋リーグ戦終了、4連覇して神楽坂をパレードし、合宿所に帰ってきてから、「御苦労さま、本当に良くこの2年間早朝ランニングを実行なさいました。4連覇おめでとう！」と労いの言葉と、天皇杯に並々と注がれた美酒を共に飲み明かした先生とのその夜の喜びの酒、感動の酒は一生忘れられない思い出である。私はこの後の「明治神宮大会」を連覇して勇退する事になった。江川、金光達「花の49年組」も卒業した。三井先生はこの後、平成3年まで野球部長を務め、通算18年間、そして六大学通算16回の優勝を経験された名

部長であった。今後ともこの様に人に恵まれ、勝負に恵まれる部長は六大学あるいはアマチュア野球界には出てこないのではないか。それもこれも三井嘉都夫先生の持って生まれた強運の持ち主、そして仁徳のなせるわざであろう。

(5)最後に

学生をこよなく愛し、野球をこよなく愛し、神宮球場をこよなく愛した三井先生は平成23年(2011年)4月1日、多くの人々に幸せを与え、そして感動を与え、天国へと召された。部長引退後、死ぬまで神宮球場に通われ、法政を愛し、野球を愛した三井野球部長を、我々法政人は決して忘れてはならない。また野球部関係者は平成27年(2015年)「野球部創部100周年」までに再び「強い法政・野球部」を復活させなければならない。それがいつも神宮球場ネット裏の通用口のすぐ真横付近の席で見られていた三井嘉都夫先生の熱い願いと思うから。

三井先生のご逝去を悼んで

桑原 正見

(元・武蔵野女子学院教諭)

あのお元気でエネルギッシュであった三井嘉都夫先生のご逝去の報に接し、大変に驚いております。先生とのなつかしい思い出が数多く去来しますが、今は静かに先生のご冥福をお祈りするのみであります。合掌。



法政大学第74回卒業式・文学部地理学科学士課程(1957年3月15日)
(前列左から2人目が三井嘉都夫先生、後列左から7人目が小生)

三井嘉都夫先生に導かれて

岡永 亮八郎

(元・法政大学地理学会副会長)

三井嘉都夫先生を憶う場合、とかく地理学科とか、法政大学地理学会での範囲に片寄りがちであるが、学者としての学問的高いご功績は地理学界のみならず、広く社会にも貢献したと聞き及んでいる。「勲三等」の受賞はそのことを物語っていると思うのである。

私が法政大学高等師範部歴史地理学科に入ったのは、昭和23年である。旧制中学(5年制)を卒業して4年間のブランクがあったが、すでに新制中学の美術の教員をやっていた。しかし、美術教師をやっていく気がなかった。この年が旧制の学生最後の年ということもあってあわてて高等師範部へ入学というはこびとなったのである。しかし、地理学を学ぶという意識はなく誠に不真面目な学生だったのである。その私を育てて下さったのは三井先生である。あのやさしい眼差しに導かれて、「地理学」にのめり込み、長く法政大学にお世話になったのである。

三井先生との初めての出会いは、先生が旧制学部をご卒業され、助手として地理学教室に赴任した昭和25年のことだった。大学の先輩という親しみもあったと思うが、先生のおられる研究室には常に学生であふれていた。これは何よりも先生の人柄によるものと思われる。当時、同期の学生に市瀬由自君や島村勇二君がいた。三井先生のあの包容力や気くばりでお世話になった人も多いはずである。

私は高等師範部を卒業すると福島県の県立高校に転任し、人文地理や歴史を担当したのであるが、自分の学力の無さをいやという程知らされた。す

ぐに上京して母校の通信制経済学科、つづいて史学科に編入学をした。当時はまだ通信に地理学科は設置されてなかった。その頃、教材研究と通信のレポート作成で夜の12時前に寝たことがなかった。当時の大学の授業を懐かしく思い出す。やがて法政大学に大学院が設置されたことを聞き、東京都の教員採用試験を受けて、東京に舞い戻ってきたのである。

まず三井先生を尋ねて大学の状況をお聞きし、地理学科3年編入の試験を受けたのである。悠々合格と思い、発表を見に行ったところ「3」の受験番号が見当らない。「ふざけんじゃないよ」と頭に来て三井先生に抗議に及んだ。落された自分の実力をかえりみないで文句をつけるなんて不謹慎極まりないのであるが、三井先生いわく「君は合格です。教務が張り出すのを忘れたのでしょう」。三井先生がいなければ再び法政大学で学ぶことはなかったであろう。高師を卒業してから4年が過ぎていた。昭和30年代に入った頃、新制大学は軌道に乗り、「法政大学地理学会」も発足した。

法政大学地理学会は多田文男先生の肝いりでできたと聞いているが、実務的に立ちあげたのは三井先生である。従って地理学会の実質的な生みの親であり、育ての親であり、学会の恩人といつてよい。その頃在学していたのは中村宗敏、清水靖夫、桑原正見、青木千枝子、相原正義の諸君で、三井先生の手足となって地理学会で活躍した。

当時、三井先生が学生を連れて通った「ボルガ」が新宿にあった。三井先生と学生との親密さは格別であったが、ただ甘やかしていたのではない。こうした中で人情の機微にふれ、成長した者もいれば、きびしく指導され、すぐれた学者になった者も出たと思うのである。

三井嘉都夫先生ありがとうございました。

練馬区のみどりの保全と創出に
貢献され区民表彰を受賞
—緑化委員会委員として30年—

塩谷 博

(元・東京都職員)

1. 練馬区におけるみどりの施策の展開

昭和30年代の練馬区は、畑の中に樹林地が点在するのどかな風景が広がり、公園緑地行政といえば、子どもの遊具を置いた公園をつくることだけでした。

昭和40年代に入り、都市化の波が及ぶとみどりの保護が叫ばれ、昭和49年には初めて「みどりの実態調査」が行なわれ、緑被率は35.9%であることが分かりました。これを30%以下にならないようにすることを目標に、緑化施策に着手することになったのであります。

昭和50年に「みどりを保護し回復する条例」が制定され、カタクリの自生地などの樹林地を守るために憩いの森制度や保護樹木・樹林の指定制度が発足しました。こういった具体的な取り組みとともに、当時は全国的に住民参加による行政施策の展開が求められた時代であり、この条例においても、緑化協力員制度や学識経験者及び住民の代表がみどりの施策の積極的な推進に関する重要な事項を調査審議する「緑化委員会」が設置されました。三井先生はこの委員会の会長として多大な業績を残されたのであります。

2. 緑化委員会委員としての活躍

私は条例制定当時、練馬区の企画部門に籍を置いておりました。その関係で、緑化委員会の委員の選定にあたって、三井先生を練馬区在住でもあり、適任であるということで推薦し、昭和55年から就任していただいた経緯があります。先生は当時多忙な日々を送っておられたのですが、快く引き受けていただいたことが印象に残っています。

地下水を専門とする先生は、樹木、草花といった植物が生きていくためには、土や水と一体となった環境を守っていく必要があり、風土や歴史との密接な繋がりも大切に残していかなければならないと説いておられました。

この考えは、その後の練馬のみどり施策に大きな影響をもたらしました。三井先生は昭和62年に緑化委員会の会長に選任され、平成19年に退任されるまでの21年間、区長の諮問機関の長として、練馬のみどりの保全と創出のために貢献されたのであります。

私も委員として一緒に議論に参画したこともありましたが、このみどりの保全の問題は個々人の資産に関わる問題でもあり、意見の対立することもありました。しかし、先生は委員会の円滑な運営に努められ、多くの人から高く評価されていました。高度経済成長期やバブル経済時に民有の緑地の喪失が進む中であって、貴重な樹林地や湧水池の保全に向けて専門識者として、積極的に助言を寄せられ、区として感謝の意を持ったものであります。

さらには、みどりと地下水との関係などで職員の相談相手にもなり、また植樹祭やかかしコンクールの審査員など快く引き受けていただき、参加した子供と楽しく談笑されていた姿がとても印象的で、温厚な人柄が偲ばれます。

3. 練馬区民表彰の受賞

平成20年、多年にわたり緑化委員会委員、ならびに会長として、自治の振興発展に貢献されたということで自治功労の区民表彰を三井先生は受け、練馬区政に大きな足跡を残されました。

この名誉ある業績を残された故に、三井先生を偲びここに改めて敬意を表したいと思います。

〔注〕本稿を纏めるにあたっては、当時の練馬区公園緑地課長(現・青少年課長)浅井葉子氏の協力を得ました。〕

三井先生ありがとうございました。

清水 靖夫

(元・立教高等学校教諭)

(元・法政大学地理学会会長)

三井先生、ありがとうございました。法政大学では人生として、研究者としての基本的な事柄をじっくりと教えていただきました。

先生といろいろお話をさせていただいたのは、教養課程が終り、2年生になって以降だったと思います。下級生の面倒を良く見て下さった先輩の中村宗敏さんや戸島正雄さんがある日、「良ければちょっと寄り道をしていかないか？三井先生と一緒にだ」と声を掛けられ、お供させていただいた。新宿西口のヴォルガでした。その後、何回もお供をさせていただいた。楽しく食事をしながら地理学界の先生方の研究方法や研究態度など、世間話を交え教室では聞けないエピソードを交え、貴重な授業で、後年、随分と役に立ちました。

また、法政大学入学後のある時、君のことを心配していたけど、ちゃんと合格していたので良かったと言われた。と言うのは、私が高校生であった昭和25(1950)年頃、中学・高校の担任で地理を教えて下さった先生が法政大学出身でした。その頃、故多田先生の銚子への巡検があり、担任の先生のお供をして連れて行っていただいた。その時の世話役が三井先生で、多田先生共々覚えていて下され、母にもお言付いただいた様でした。

ある夜、先生のお宅での会合に初めて伺った時、周囲がすでに暗く、道に迷いかけた時、自転車に乗った方に声を掛けられ、近所だから後に乗りなさいと言われ、お宅まで連れて行っていただいた。自転車の主は谷津先生でした。

先生から常に聞かされていた話がありました。終戦直後、米軍の進駐前に参謀本部から、多田先生の指示で多数の地図を、将来の研究資料にと持ち出すお手伝いをした、それが資源科学研究所に所蔵されている地図群であると話されました。現今話題になっている外邦図のことで、平成15(2003)年11月に駒澤大学での外邦図研究集会で、

当時の生々しい状況を先生に講演していただき、参加者に感銘を与えられました。

思い出は尽きません。未だ未だお元気と信じておりましたのに、なんとも残念でたまりません。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

三井先生との思い出

内藤 次郎

(早稲田実業高等学校兼任講師)

我々の学年は法政大学の第99回卒業生に当たり、標準的な入学年度は昭和59(1977)年度である。三井先生と初めてお会いしたのはおそらく入学後の地理学科ガイダンスあたりであったろうと思われるが、もはや記憶も定かでない。何しろあれから既に35年近い時が流れてしまっている。学問上の先生の御功績やそれらを通じた思い出は、多くの先生方や先輩方がお書きのことと思う。私には、愛する恩師・三井先生との誠に私的でさやかな思い出をしばし綴らせて頂きたい。

私が持つ先生の最も古くて鮮明な記憶は、「地理学概論」の授業ではなかったかと思う。よく輝く大きな瞳、よく通る大きなお声、きりりと伸びた背筋に皺一つないスーツ、丁寧に書かれる黒板の文字、そんなお姿で自らのご経験に基づかれた日本各地の地理的事例を講義されていた。他者によって書かれた教材ではなく、御自分で導き出された結果を示された授業に接して、ああ、これが大学の授業なのだ。大学教授の先生とはこのような方なのだと私は思った。あの時、先生は55歳になっておられた。

地理学の中でも三井先生の御専門である陸水学では、フィールドワークが多かった。「陸水学習会」という学部生の研究会に属していた私は、先生のお手伝いをさせて頂く機会に時たま恵まれ、あちこちと荷物運びや運転手としてついて行かせて頂いた。今にして思うと先生との旅は全て本州の内側であった。後の大学院生時代を含めて一番頻繁に足を運ばせて頂いたのは岳南地域(富士山南麓)

であった。富士市でお生まれになり、幼少期をこの地で過された先生は、昭和22年からこの地域の地下水調査を始められ、港湾開削や工業化に伴う河川の水質汚濁や地下水の塩水化等を中心に、この地域の地理的事象を継続的に研究されておられた。

ご自分では車を運転されない先生であられたが、富士市内のどんな裏道・抜け道も正確に覚えておられ、今流に言えば、とびきり親切なナビと一緒に走っているようなものであった。これでもう富士市内で道に迷うことは無いぞと、私は大いに喜ばせて頂いた。

一度、夏休み中の調査の時であった。先に先生方に降りていただいた後、私は車を駐車場内で地元のタクシーにぶつけてしまった。急いで先生に報告に走った時に先生は、まず怪我人の有無を確認されて、その後は私の不注意から起きた事故に対して批判めいた事はおろか、事故そのものについても自ら一切何も仰らなかつた。事故証明を取りに行った交番でも実にこやかに堂々とされておられた。果して自分だったらこのように心の広い大人になれるものだろうかと思ったが、百年たっても決してそのようにはなれないということに、とっくの昔に気がついていた。

田子の浦での夕食時、先生は鮎の田楽を頭から美味しそうに齧り付かれておられた。身をほぐして食べる私をご覧になって、先生は「内藤君、鮎というものはこうやって食べるものですよ」と、その作法は教え下さった。父からも教わらかつた鮎を食す作法である。

別の機会には、先生に一番好きなアルコールの種類は何ですか？と伺った。先生は即座に「やっぱり日本酒だねー」と、うっとりと言尾を伸ばしてお答えになられた。当時、日本酒はまったく飲

めない私であったが、先生の御表情から察するに、これはよほど美味しいものであるに違いないと感じ、その後大いにこの道に精進させて頂くことになった。

教室でのゼミで拙い発表をしてしまい、目から火が出そうになった時も、先生はいつも最後に褒めて下さった。お叱りを受けたこともあったはずなのに、優しいアドバイスと、あの笑顔しか思い出せない。思えば先生から一体幾つもの、人として生きて行くべき道を教えて頂いてきたことであろうか。

つい先日、先生との思い出を辿りに岳南方面へ旅に出た。かつて同道させて頂いた道はあちこちで大きく変貌を遂げていた。あの頃の記憶も大分薄れてしまい、道に迷わぬまでも幾度か戸惑った。3日間雨空に祟られたが、帰り際に小田原の先でもう一度振り返った時、富士山頂が雲間で秋の日を浴びていた。

我々の学年も間もなく初めてお会いした時の先生の御年齢に届こうとする。先生の教えを頂きながら、あまりにお粗末であった我が半生に愕然とする。しかし先生はあその後、更に長くご活躍されて、御研究と共に多くの人間を育てられた。私もいやしくも教育の世界に身を置く者の端くれとして、今度、先生とお会い出来た時に、たった一つだけでもまた褒めて頂けるような仕事をこれから残していこうと、今心に誓った。

先生が、あの時下北半島で飲んでおられた陸奥の酒「男山」を、また先生と心ゆくまで酌み交わさせて頂きたいと、あの頃の仲間達は皆そう願っているに違いない。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

〃恩師三井先生を偲ぶ。

飯田 貞夫

(茨城キリスト教大学名誉教授)

(前・法政大学地理学会会長)

三井先生の急逝の知らせを法政大学地理学教室から受け驚きました。

私が三井先生にお会いしたのは、茨城キリスト教短期大学を卒業し、法政大学地理学科に編入してからのもので、故大矢雅彦先生(早稲田大学教授)より、資源科学研究所の地理学研究室で紹介していただきました。その後、三井先生、大矢先生より、資源科学研究所で地形分類の方法、地図の整理(当時、資源科学研究所には5万枚の東南アジアの地図がありました。夏休みや冬休みには、資源科学研究所の調査に同行させていただきました。佐久間ダム、秩父の地下水の調査、江戸川の水質調査は、私の記憶に強く残っています。佐久間ダムでは水温の変化と水質について調べました。そして、水は落差があると水温が低下する、そして水温が低いと作物の収穫に影響することを先生から学びました。江戸川の調査では、pH、電気伝導度、流速の測定方法など基礎的な調査方法について教えを受けました。電気伝導度は、汚染物質や異なった水が流入すると数値が400～500 μ S/cmと大きくなること、pHも同様に汚染物質が流入すると変化する事などを学びました。私が河川の調査など現在、研究出来るのは、この時学んだものです。特に大学院の修士論文は「東茨城台地の地形と地下水について」であり、三井先生の御指導を受けました。東茨城台地には浅くて細長い谷と楕円型の窪地があり、地元の人々は「巨人の足跡」と呼んでいます。この特殊な地形の形成過程を研究する時、先生に地下水と関係しているのではとアドバイスを受けました。そして日本で揚水している地下水は第四紀層に賦存するもの

が多い事、これらの地層は地形ごとに分布や層厚、堆積、環境、形成時代も異なる事などを知ることができました。

また私が就職する際の戸板女子高等学校に勤める時のことです。私が面接を受けに行くと、その前に大学からわざわざ戸板女子高等学校に来て、学校長に推薦してくださったとのことでした。後日、当時、教頭でいらした高橋賢先生より聞きました。大学教授が学生を推薦するために来てくださることは普通では考えられないことです。三井先生は、このように学生の面倒みの良い方でした。また、私が大学に勤めることになった時のことです。「飯田君、大学で学生を教えることは、自分自身が調査や研究を行ない、一年に一回以上は論文を書き、学会発表をしろ。そして授業の下調べをすることが大事です」という教訓を受けました。このことは私が退職するまで守りました。

また、私の息子も法政大学の地理科の卒業生です。しかも卒業論文の指導も三井先生でした。親子ともども地下水の調査、研究で御指導を受けました。

私にとって先生は学問の上でいろいろな御指導を受けましたが、就職や息子のことで大変お世話になり大恩ある先生でした。



三井先生と一緒に(三井宅にて)
[右：飯田貞夫、左：飯田光治・息子]

思い出は走馬灯のように

宮垣 津繁

(元・法政大学通信教育部指導講師)

桜花咲く2011年4月1日にご逝去された三井嘉都夫先生、先生の在りし日の多くの思い出の中から断片的ではあるが、私が学部(地理学科)の学生だった頃の思い出を中心にいくつかご紹介させていただきます。

先生との初めての出会い、それは私が学部の2年生の時である。その頃は、かの「大学紛争」の嵐がまだ吹き荒れていた。法政大学も封鎖されたり、学内が騒然としていて休講が多く、普通に講義を受けられるような状態ではなかった。確かその当時、地理学科の専門科目の講義に使われていた「新館」という蔦のからまった古めかしい建物があり、狭い教室で先生の『地理実習』の講義を受けたことを今でもよく覚えている。

激しかった「大学紛争」も3、4年生の頃には、時々くすぶり返してはいたものの、何とか普通に講義を受けられるようになった。私が陸水学について大きな関心をもつようになったのは、先生が担当されていた『海洋陸水学』や『地理学演習』を履修し、更に『現地研究』にも参加するようになってからである。

先生の名調子ともいえる軽快なテンポの講義は大変分りやすく、時どき冗談が入るので90分の授業も一度たりとも退屈することはなかった。『河川学』の洪水についての講義の中で、河川沿いにある温泉に入っていた人達が浴槽もろとも濁流に押し流されていった話などは、まるでその場にちょうど居合わせたかのような実況中継さながらの描写ぶりで、印象に強く残っている思い出の授

業の一コマである。

『現地研究』の楽しみの一つでもあるコンパでは、学生からのお酌を次々と受けても、先生は酔うことを知らないかのように平然としておられ、まさしく噂どおりの「酒豪」だった。そして、酔うほどに出てくる先生の歌といえば、知る人ぞ知る十八番の『船頭小唄』、目を閉じて渋い声で熱唱されていた姿が鮮やかに目に浮かんでくる。とにかく、酔えば酔うほどにバラエティーに富んだ話が飛び出してきて、時間が経つのも忘れて夜遅くまで先生を囲んで飲んだものである。

卒論は先生にご指導して頂いた。年の瀬に友人と先生のお宅に押しかけて行き、何とかまとめ上げた草稿を読んで頂いたが、何かと慌ただしい時期にもかかわらず、きめ細かく熱心にご指導して下さいたことを今でも心より感謝している。その時に、奥様の入れて下さった紅茶とショートケーキをご馳走になりながら、先生と談笑したことが大変なつかしく思い出される。

その後、大学院でも先生のご指導のもとで研究を続けたが、何ぶんにも出来の悪い院生で、先生にはご心配をかけてばかりいたように思う。院生のときには何度も現地調査に同行させて頂いた。小柄な先生ではあったが、そのエネルギッシュな行動力には圧倒されたものである。先生は常づね、研究というのは文献ばかりに頼らず、自分の足で実際に現地を歩いて調査し、データを作ることが大切だと仰られていたが、まさに「至言」と今さらながら痛感している。

先生の思い出は走馬灯のように次々と脳裏を過ぎ去っていくが、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げて、この辺でペンを置かせて頂きます。

合掌。

三井先生ご指導ありがとうございました

宮岡 邦任
(三重大学准教授)

4月1日の深夜、学部時代の友人からメールが届き、三井先生のご逝去を知りました。メールの表題に目を疑いつつ、お通夜に出席してその事実を受け入れることになりました。

現在、大学に教員として勤務しておりますが、そのきっかけと道筋をつくって頂いた法政大学・地理学科の先生方の中でも、三井先生は私の中でとても大きな存在でありました。

三井先生との出会いは、学部1年の「地理学概論」の講義でした。すべてが興味深い内容でしたが、中でも最も印象に残っているのは、利根川における洪水時の河床堆積物の移動についてのお話です。河床に穴を掘り、番号を付けた煉瓦を重ねるように埋めておき、洪水後にその地点から流失した煉瓦の数から侵食量を明らかにするとともに、下流に向かって流された煉瓦の分布を調べていくことで掃流される範囲を明らかにするというお話は、当時の私にとって衝撃的で、自然地理学を専門に勉強して大学院への進学を決心したきっかけにもなりました。下北半島や銚子の巡検では、実際に陸水学の調査手法を学びながら、フィールドワークの楽しさを教えて頂きました。そして何よりも、授業の巡検ではありませんでしたが、毎年春に行われる岳南地域の地下水調査も忘れられない思い出です。今でこそ地下水学を私の専門分野としておりますが、学部生時代には普段、目にする事のない地下の水よりも、当時、東京都心部の神田川や目黒川流域で頻発していた内水氾濫に興味があったため、現地での調査はあまり真剣ではなく、夜の先生との酒盛りを楽しみに参加していたような気がします。学部を卒業し、大学院に進学して地下水の研究を進めていくことになり、OBとして岳南地域の調査に再び参加し始めて、はじめて地下水調査の重要性を認識し、夜のミーティングにも臨むようになったように思います。その後の酒宴でも漸く少しずつ研究について

先生と議論ができるようになり、酒盛りは貴重なゼミの延長戦となりました。さすがに就職してからは毎年のように岳南地域の調査に参加というわけにはいかず、数年に一度の参加になってしまいましたが、参加させて頂く度に先生にお会いすることが出来たので、先生は定年退職されて以降も定宿が閉鎖されるまで岳南地域の調査にはいらして頂いていたのだと思います。

岳南地域における地下水塩水化問題は、高度経済成長時代の地下水の過剰揚水に端を発し、現在では吉原駅周辺の一部地域を除いて、塩水化はほぼ沈静化したと言われております。そういう意味では近頃は、「今更岳南？」という意見もあるようです(実は私も院生時代くらいまでそう考えていたと思います)。しかし、地下水-海水相互作用については、近年、IAPSO、IHP、LOICZ (IGBP) など国際的な枠組みにおいて種々のプロジェクトが展開されており、水文学の中でも非常に注目される分野になっています。岳南地域で行われている年に一度の定期的な観測と趣旨については、データの質さえ担保されれば世界の地下水の塩淡水研究の流れに沿ったものであると言えます。また、環境変化を知る上でのモニタリングはきわめて重要であり、将来の環境変化に伴う地域の地下水環境保全の観点からも必要です。形を整えながら何とか調査を継続させていくことは、先生が築かれた水文学ゼミナールの伝統を守ることにもなりますし、それは「法政地理」の水文学研究室と三井ゼミOBが、先生にこれまでご指導頂いた恩返しが出来た最大の部分なのかもしれません。

これ以外にも先生にはお会いする機会が数多くあり、その都度励ましのお言葉をかけて頂きました。学部を卒業し20年、もともと先生と背丈があまり変わらない私は、体型だけは四十代半ばにして先生にかなり近づいてきましたが、教員として、研究者としての力量はまだまだ及びも付きません。これまでに頂いた励ましの言葉をもう一度胸に刻みつつ精進し、そのうちきちんとした成果を墓前にご報告できればと思います。三井先生、長い間ご指導ありがとうございました。合掌。

座談会

三井嘉都夫先生を偲んで

飯塚 芳男 (元・実践女子学園教諭)

清水 靖夫 (元・立教高等学校教諭)

大関 保 (元・大成高等学校教諭)

井上 奉生 (法政大学人間環境学部教授)

司会 佐藤 典人 (法政大学文学部教授)

佐藤(司会) 本学会の会長を長く務められた、法政大学名誉教授の三井嘉都夫先生が2011(平成23)年4月1日にお亡くなりになりまして大変に驚きました。あの東日本大震災が3月に起こって、日本の中が何かと動揺している時期でありました。しかも、年度末、年度初めという時で、最初に大関さんから三井先生の訃報を電話で教えて頂いた時、一瞬、信じられなかった次第です。いつも三井先生のお元気な姿が脳裏にあるものですから、まさかと思っていました。でも考えてみれば、88歳で米寿を迎えておりましたから、それなりに時間が過ぎていることは確かでありますね。

そこで、生前の三井先生と関わりの深い皆さん方に集ってもらい、先生を偲んで頂きたいと思った次第です。まず、最初に皆さん方の紹介も兼ねまして、三井先生との関わりに触れて頂ければと思います。飯塚さんからどうぞ。



司会 佐藤典人

飯塚 親戚にあたる飯塚です。私は昭和25(1950)年に法政大学地理学科へ入学しました。1年生の時にはまだ三井先生にお会いしてないですが、その後、結婚などで色々とお世話になり今日に至っております。

佐藤 では井上さん、お願いします。

井上 三井先生とのつき合いというのは、あまりに身近な立場に居たもので大して気にしたことなかったのですが、おおよそ2つぐらいに分け

ることができるかと思うのです。つまり学生時代と、それから(財)資源科学研究所(以下、資源研と表記)でのつき合いです。でも後日、私が法政大学に奉職してからのつき合いは、それほどなかったと思います。

佐藤 それでは、大関さん。

大関 私と先生との最初の出会いは、記憶がいまいですけど、確か昭和31(1956)年だったと思います。教養課程から専門課程に進みまして、三井先生の「自然地理学概論」を受講したことが出発点かと思っています。

佐藤 それでは、清水さん。

清水 三井先生とは大変に長い間の関わりがございしますが、多分、最初にお目にかかったのは昭和25(1950)年、私がまだ高校生の頃です。私の中学・高校の社会科の恩師が法政大学の卒業生で、多田文男先生の銚子巡検に付いて行ったのです。その時、三井先生が同行されていたはずで、それ以来、今日に至っております。

佐藤 三井先生は昭和25(1950)年に法政大学に助手として採用されて以降、およそ40年間奉職なさっていたようですから、その間、多くの学生を教え、たくさんの教え子がいるわけです。私は、昭和45(1970)年に大学に入ってこの中では一番若輩者であり、大学院に進んでから先生の教えを実際に受けたわけです。

それゆえ皆さん方のほうが長い間、先生と接触しておられたと思いますけれども、とくに先生との間で鮮明に記憶に残っているエピソードなどがおありでしたら、ご紹介頂ければと思います。

飯塚 卒業後、同級生が計画した懇親会や一泊

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

の旅行には、三井先生はほとんど皆勤でしたね。

清水 法政大学の学生になってから、私の学年には学科生が16人しかいなかったのですけれど、先生方が14人ですから、今に比べると贅沢なくらい…。それで夜学の講義が終わりますと、週1ぐらいで新宿の『ボルガ』という所に飲みに行くのです。皆さんご存知ですよ(笑)。三井先生が負担してくれて、私には一度も払った記憶がないのです。

そこでの話というのは、先生方の専門分野の背景、あるいは学会での先生方の役割などで、講義では教えて頂けないような事柄ですね。あの時に随分と勉強になりましたし、私にとりましてとても大きな糧となりました。あの店に計何回行きましたでしょうか？

佐藤 当時だって、それなりに飲食費はかかるわけですからね。

清水 先輩方がそれなりに支払ってくれていたのかどうかわかりませんが、少なくとも私には支払いをした記憶がないのです。先生のお宅には『ボルガ』からお歳暮が届くという話を間接的ながら聞きましたから、かなりご散財になられたのではないのでしょうか。でも、そこで教わったことはとてもプラスになりました。

佐藤 井上さんなどの時代も『ボルガ』ですか？

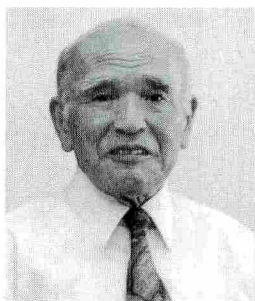
井上 よく行きましたね。飲食代を払う、払わないは、そのときに応じて(笑)。

佐藤 何人ぐらい行くのですか？

清水 少ない時で3、4人ですか。もっと多いこともございました。

井上 でも大体は3、4人ぐらいですかね。そこら辺は三井先生も心得ていて、10人も20人もと言うわけにはいかなかったでしょうね(笑)。

大関 とにかく三井先生の講義の話がああ調子で終わらないじゃないですか。もう講義の時刻はとっくに過ぎていても、まだ止めないのですよね。



飯塚芳男

そして最後に「君たち気の毒だったな。どこかへ行こう」と、それで『ボルガ』へ行くわけです。新宿方面に帰る学生がほとんどいなくて、私の頃もやはり3、4人だったですね。当時、私なんかは生活に苦勞してしまして、飲みに行くなんてことはまずなかったですから、『ボルガ』でごちそうになってホッとしたということがありますね。

そんなことが何回かあった後、「君、図を描けるか?」という話になって、「ちょっと資源研に來い」というわけです。それで行ったら「おまえ、関東地方の地形分類図を描け」と言われてね。それで描いた図が先生をお手伝いした最初なのです。井上さんもお存じだと思うのですが、その分類図は結構、長いこと使っていたね(笑)。

井上 使っていましたね。

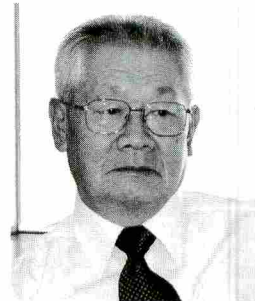
大関 原図は大きな図なのですが、それを縮小していろいろな論文に使っていましたね。

その後、三井先生は資源研で埼玉県の地下水調査をしまして、「おまえも一緒に來い」というので、ボーリングデータを集めてきました。それを今度は図化しろと。それは今でもわが家にあるのですが、厚さにしたら相当なものです。それで「ご苦勞さん」ということで何がしかの、生活の糧になるような、いわゆるバイト代を頂きました。そんな思い出がありますね。

佐藤 井上さんには、どういう思い出がありますか？

井上 今、大関さんが言ったようなことで、私が資源研へ行ったのは何年だったかな？ 多田先生が「ちょっと資源研へ行って手伝わないか?」と言うので、行ってみたら三井先生の研究室というわけです。でも最初の頃、私は浅井辰郎先生の部屋に出入りしていましたけれどね。

三井先生とのつき合いは、現地調査が主だったですね。その頃からちょうど利根川の調査が始まりまして、学生時代は黙っていても飯が食えるし、



大関 保

現地へ行こうということですね(笑)。私の同期に寺西経昭さんという方が居まして、彼なんかと一緒に資源研に出入りしていましたね。

現地調査は利根川から始まって伊豆半島とか、現地だけは色々な所へ行かせてもらったという印象が強いです。あの時、利根川の調査では、利根大堰と利根河口堰の2つを行っていましたので、若いと言われながらも現場監督みたいなことを私はやっていました。

大学院に進んでからは資源研の助手になりました。今度はもう給料をもらうことになりますから、そうなると手抜きはできないと。



井上奉生

佐藤 ちょうど私なんかは学生の頃、井上さんは資源研で助手だったんですね。

井上 そうだったと思います。

佐藤 井上さんに「アルバイトに來い」と私は言われて、東海村の調査に行ったのが最初です。

井上 そうそう、そんなこともありましたね。

佐藤 三井先生は昭和25(1950)年の卒業と同時に助手として採用されたということですが、その頃のお話は私には知る由もないので、その辺のお話をしてくるととてもありがたいですが。

飯塚 昭和27(1952)年に静岡へ巡検に行った時、白糸の滝などを回った帰りに、先生の実家に立ち寄りしましたね。

佐藤 現在、富士市となったご実家のほうへ。

飯塚 そうです。

佐藤 その当時、現地へ行く際の交通機関は、一応、東海道線か何かで行くのですか？

飯塚 ええ、列車です。

佐藤 向こうの現地を回るときはどうするのですか？

飯塚 それは定期バスです。

佐藤 清水さん、三井先生の助手とか講師あたりのお話は？

清水 嵐の中を下田へ行ったことがございま

した。あと登呂遺跡へ、三井先生と一緒に夜行・日帰りで行きましたね。私たちは大学へ来て勉強しようと、地理学科の研究室へたびたび伺いました。それは大きな大部屋だったですね。三井先生がいらっしゃると何となく私たちも安心できるし、何か分からないとすぐ質問できますから、何人かの学生と一緒にその部屋に入り浸りましたね。そして三井先生は他の先生方から苦情を言われたようです。それからは三井先生が叱られたということで、僕らも少しその部屋へ行くのを遠慮しようと、そんなことがありました。



清水靖夫

佐藤 その頃の助手というと、学生の面倒を見るほかに、教壇には立っていたのですか？

飯塚 私たちは地形図の彩色を教わりました。

清水 私と青木千枝子さんとは同級生ですが、年齢は10歳ぐらい青木さんが上です。青木さんは昌平で市瀬由自さんに教わったようですね。私は立教高校で大沢詮先生という旧制学部2回生卒の人に教わったのです。

法政大学へ来ましたら、今度は「地理学概論」のような科目で三井先生に教わるわけですが。青木さんも私も、「あれっ」高校時代に教わったことと同じだと(笑)。と言うことは、多田先生だとか、その他の先生方が三井先生の勉強する頃に講義された内容を、今度は三井先生が咀嚼をして僕らに教えてくださった。ですから、だんだん講義の密度が濃くなるのですね。「同じ流れの中で育てられていくな」ということを感じましたね。

佐藤 今、話しに出ました昌平では、本学の市瀬先生も教鞭をとっていらしかったのですか？

飯塚 多田先生の口添えで昭和21(1946)年から夜間専門の御茶ノ水にあった昌平に三井先生も教えに行っていたようです。当時は「昌平中学」です。そこに三井先生は昭和28(1953)年頃までおられて、その間、教務主任もされていました。その後、市瀬さん、それから一人おいて私、その後には上田茂春さんと続きます。

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

佐藤 そうすると、佐々木茂さんなんかも昌平で習ったのでしょうか。

飯塚 そうですね。新宿・大久保の資源研の構内にあった独身時代の三井先生の宿舎に転がり込んで、3ヵ月ぐらい寝食をともにした学生もいるようですね。とても学生に慕われていた先生ですので、その当時の卒業生の集まりが去年までずっと続いていました。去年は病院に揃ってお見舞いに行ったそうです。昭和20年代の昌平の卒業生でしょうね。

佐藤 大関さんが入学された時には、冒頭の関わりにも出ましたように、三井先生は「地理学概論」を教えていたのですか？

大関 教養課程で教わり、それから専門課程でまた概論的な講義があつて、それがほぼ同じ内容なのですね。私なんか、「同じことを2回も講義するのか？」みたいな感じでいましたけど。

佐藤 その頃だと教壇に立たれて、もう5～6年経っていますか？

大関 そうですね。当時、三井先生は専任講師になられていて、渡辺一夫先生が助手だったのです。それから渡辺先生が専任講師になられて、その後に市瀬さんが助手で入られた。

清水 そうですね。

佐藤 飯塚さんが実践女子学園に勤められたのは、いつ頃ですか？

飯塚 昭和29(1954)年9月です。その2～3ヵ月前から昌平で教えていました。

佐藤 先ほど井上さんからもお話が出ました資源研と言うのが、僕などは学生ですから、どういう関係の機関なのか分からないままにアルバイトをしていましたけれど、あれは確か財団法人でありましたので、どこかの役所関連の機関でしたか？

井上 最初は文部省なのです。設立が昭和16(1941)年12月8日。それで戦後間もなく、ある意味では潰されたのです。やはり米軍が関係しまして、そういうことを旧い人たちからよく聞いていましたね。

佐藤 あそこには様々な分野の人たちがお勤めになっていましたね。

井上 土地と生物と水。3つの部門がありまし

て、三井先生は水ということになりますね。そのほかに地質の人たちや植物屋さん、動物屋さんがありました。調査は一緒に合同でやったりしました。例えば、先ほど触れた利根川河口の調査は、主に生物屋さんの貝だったね、シジミです。あそこはそれで生活している人がたくさんいましたから、河口堰の建設でシジミがどうなるかという話ですね。それを合同で調査しました。だから、学術論文ではないけれど、資源科学研究所の報告にその類がたくさん載っているわけです。主に委託調査ですね。でもこの委託というのは民間じゃないです。科学技術庁であるとか、建設省とか、水資源開発公団(現・水資源機構)とか。こういう機関の委託調査をやっていました。東海村の調査なんかもそうです。

清水 以前、三井先生を「外邦図」の研究会に引っ張り出してという用語がありますがけれども、資源研にどういう形で「外邦図」が持ち込まれたのか？

そんな話を「外邦図」を研究している人たちに、平成15(2003)年11月8日・会場の駒澤大学で三井先生にお話してもらいました。中野尊正さんとか、その時に「地図を持ち出せ」と言った参謀の方にも来て頂いた。それから通信教育部を卒業して防衛庁関係に勤めていた方も居まして、その方も当時、色々のご苦勞されたようなので、やはりお話してもらいました。その後、三井先生がその話の内容を文章に著して下さったのです。それに拠りますと、資源研ができたのは、さっき井上さんが話したように昭和16(1941)年12月8日の開戦記念日のようですね。

井上 そうそう。

清水 昭和20(1945)年5月の空襲で高樹町にあったその資源研が焼かれて、戦後、例の戸山ヶ原・百人町の技術研究所の建物の1つを受けてと三井先生は書いてあります。ただ、最初は米軍の監視が大変に厳しかったと。

井上 そうだったですね。あの一帯はずっと第6陸軍研究所だったようで、ガスの装置があるのです。

佐藤 毒ガスがどうのこうのという話は聞いた

ことがありますね。

清水 要するに、戸山ヶ原の陸軍の研究中枢だったですね。今で言えば、新宿の青物市場の東側一帯になりますね。

井上 今でこそ国土交通省の建築研であるとか、筑波大の一部となった工学研究所とか、それから科学博物館とか、あそこら一帯は全部そういう建物であったということですよ。

佐藤 その資源研に三井先生が関わったのは多田先生が勤めていた関係ですかね？

清水 多田先生から誘われたと、三井先生は書いていますね。つまり高樹町にまだあった時に「誰か資源研の雇員にならないか？」と多田先生から誘われたと、大変ありがたいという気持ちで、三井先生は書いています。

佐藤 恐らく大学が夜学だったから、昼間は資源研に行って、教える時に大学へ来るという感じですかね。

井上 資源研では専任でなかったのではないですか？地質屋だとか植物屋さんなんかは専任で居たと思うのですが、残りは専任じゃないと思います。浅井辰郎先生とか阪口豊先生がいましたけれど。

佐藤 そういう意味では比較的、不定期に。

井上 不定期ですね。今の時代にはそういう形が可能なかどうか、わかりませんけれどね。

佐藤 だけど、そういう場所があるのは、研究をする上で結構、良かったわけでしょう？

井上 資源研が閉鎖するという時、総合的な研究機関がないと、研究なんてみんな独立しちゃうでしょう。そうすると、もうみんな縦割りです。ですからね。予算まで縦割りですから、資源研みたいなところは貧乏だけど常に合同で調査できるじゃないですか。その点は良かったですね。

佐藤 学問を横断的に。

井上 横断的にできるという所が良かった。我々・地理屋も地質屋さんと同様に何度も行ったし。

佐藤 三井先生は新婚時代に資源研に住んでいたのですか？

飯塚 独身の時から新婚時代を経て、現在の練

馬に移るまで住んでいましたね。

佐藤 そのぐらい鷹揚な時代だったのですね。

飯塚 間仕切りは本当に簡単なものだったと言っていました(笑)。

井上 倉沢秀夫先生なんかと一緒に居たと言っていましたよ。

佐藤 その頃、飯塚さんは訪ねて行ったりしたことはあるのですか？

飯塚 いや、ありません。

佐藤 大関さんはどうなのですか？

大関 話では聞きましたけど、物置みたいな部屋に居たという話は、よく聞きました(笑)。

井上 最後にそこに住んだのは僕だったですよ(笑)。

佐藤 井上さんも住んでいたことがあるのですか？

井上 あるある、だって家賃がただだもの(笑)。

佐藤 その頃、僕なんか学生で、井上さんからアルバイトに雇われて三井先生の部屋に通っていましたね。仕事で手を動かしつつも、雑談しているわけだけれど、そんな時に三井先生が廊下を革靴でカッカッと鳴らしながら足音とともに来る。途端にみんな無口になって、まじめに仕事をしているかのような顔してね(笑)。大関さんが「閣下」と三井先生にあだ名をつけたのは、その事からですか？

大関 そうじゃない。秋岡先生は実際に閣下だったでしょう、それに由来しているのです。三井先生を「資源研の閣下」と、確か戸谷康義君あたりが言い出した。それで「閣下」が来たとか。

佐藤 革靴の音がカッカッと鳴るものだから？ではない。

大関 だんだん曖昧になって、そのうち戸谷君は私のことを「セミ閣下」と言ったくらいですよ(笑)。

井上 大体、口がうるさいとそうなっちゃう(笑)。

清水 秋岡先生は勅任官で、文官ですから陸士の教頭止まりで、それ以上は進めないですね。三井先生の文章をみると、そんなことから士官学校系列の先生をみんな法政の地理に集めることが可

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

能だったと、それを多田先生から頼まれたりしたと書いてありましたね、それから三井先生自身も、多田先生のお宅に下宿していたことがあるようですよ。

飯塚 そのようですね。

清水 東京に出てきて住む所がなくて、資源研に勤めながら多田先生のお宅に住まわせてもらったと、食料もない頃ですから大変に助かったという話です。多田先生と三井先生の関係というのは、普通の人の関係よりもはるかに濃いですね。

井上 濃かったようですね。

佐藤 僕なんかは、三井先生が地方へ調査に行き、ついでに買い出しをし、野菜とかを背負ってきた話しか聞いたことがないですけどね。

清水 最初に話した銚子に行った時です。ちょうど多田先生の戦友が銚子にいらっちゃって、帰りに市場の近所でその方に会ったのです。多田先生が巡検に連れていってくれたのは十数名だったのですが、その方が全員にサンマを4～5匹ずつ持たせてくれたのです。昭和25(1950)年頃ですから、まだ生鮮食品が自由にならない時代でして、何しろ美味しそうなのだったのです。それを持って家に帰ってからというものの、私の両親(もう亡くなりましたけれども)は、サンマというと銚子で、目黒じゃないのですね(笑)。

井上 同じように、三井先生は吉村信吉先生と色々調査をしています。だから、三井先生は調査マンですね。机に座って研究するのが好きだったかどうか？

佐藤 現場へ出ているほうが性に合っているとか？

井上 まず現場だね。北上川であるとか、石巻とかですよ。あそこへは何回も行って、あの先生は何より現場が楽しいのですね。

佐藤 現場と言えば、下北半島の田名部もそうですか？

井上 幾つかありますね。九学会から始まって、色々な関係で調査をしましたね。田名部の調査もそれに入るのかな？ 米代川の塩水遡上とか。佐藤さんなんかは田名部へ行かなかったですか？

佐藤 行ったんですよ。その頃から、東海村の

次は田名部のような記憶がありますね。

井上 夜中に観測して。

佐藤 田名部川放水路の川に落ちてね(笑)。夜中、街中は盆踊りで賑わっているのだけれど、こっちは放水路で塩水遡上の徹夜観測。ただ、あのときもリュックに観測機器を入れて現地へ持っていくかざるを得なかった。重かったなあ。

井上 先ほど大関さんが触れた埼玉県の調査も、流速計から何から全部リュックサックですからね。それで何班かに分かれて調査するのです。

佐藤 今だと自動車で運べるけれどもね。

井上 今は車で全部移動だけれど昔は歩いてですよ。常に地図を見ながら。

大関 そう言えば、「大関君は山登りしているのだから背負えるのでしょうか?」と、おだてられつつ重い機器を背負わされてしまうんだよな(笑)。

佐藤 当「法政大学地理学会」を設立した頃をご存じの方だと、やはり飯塚さんとか清水さんあたりですか？

清水 かつて「地理学科卒業生名簿」を刊行しましたね。そこに多田先生の名前で「法政大学地理学科40年の歩み」という巻頭文があります。これだけの内容でありますから多田先生お一人じゃなくて、おそらく三井先生あたりが一部、下書きされたのではないのでしょうか？

佐藤 当地理学会を立ち上げたのは、清水先生なんかが在学している頃ですか？

清水 もっと前ですね。

佐藤 中村宗敏さんあたりですか？

清水 それよりももっと前だと思います。ただ、幾つかの波があって、そういう人たちがいる時に活動が活発になったのです。ですから当地理学会でもあちこちで巡検をやられたと記憶しています。当時1泊で巡検しましたね。

佐藤 当学会の機関誌が途中まで来て途切れて中断があり、また復活したりしていますが、それは活動の波ですか？

清水 ええ。それと学生運動が盛んになった時にも、ちょっと途切れしましたね。

佐藤 そうですね。そこら辺からは私の記憶に

もあります。大関さんが在学していた頃は、法政大学地理学会という存在はどうだったのですか？

大関 ほとんど活動していませんでした。ただ、あの頃は中村宗敏さんとか、それから亡くなってしまった戸島正雄さんとかが先頭で活躍していましたね。

清水 それに、現在もお元気な岡永亮八郎さんとかもね。

大関 あのあたりの方が盛んに檄を飛ばすのだけれど、なかなか乗らないという時期だったな。

佐藤 確かに、先ほどいった紛争の頃で活動が止った。それでも代理徴収で会費300円を納めていた記憶はあるのだけれど、活動は停止状態でした。その辺を当時、学科の教員でありました大貫俊先生は随分に苦慮していました。地理学科の卒業生のためにそういう組織がきちんと存続するべきだと。

昭和36(1961)年から地理学科は昼間部に移行しましたね。井上さんはその1回生ですか？

井上 いや違います、私は2回生です。1回生は小見波正隆さんと漆原和子さんですよ。

清水 立教高校に来た湯川宣雄さんなんかも1回生です。

佐藤 1回生になると、卒業生名簿を見てもそれなりに学生数が多くなっていますね。

井上 1学年で80名ぐらいにはなるのですね。

佐藤 現在100名弱ですからそんなに変わらないですね。

井上 私も学校へ行ったのは1年ぐらいで、あとは資源研にずっと行っていました。大学に来ていることは余りなかったです(笑)。何しろ仕事が多まっちゃうものだから、与えられた仕事をこなさないと三井先生の機嫌が悪くなるのでね(笑)。

佐藤 井上さんは三井先生の助手のようなものですかね？

井上 学部で学生時代が終わってからね。

佐藤 三井先生には資源研があって、大学の講義で学生を教えていて、かつ井上さんのように大学院に籍をおきながら資源研に助手で入られて、その頃に私はアルバイトで行ったりした。資源研があったということは、やはり三井先生の研究に

おいてはすごく重要だったのでしょうか？ その当時の三井先生の研究や学生指導などに関して、何か思い出などありましたら、紹介して下さい。

井上 三井先生は資源研に籍を置いていた関係上、格好の研究の場を与えられていたのではないですか。

佐藤 三井先生の学位論文である「河床変動の問題」はその頃よりももっと前ですか？

井上 その前ですね。ただ、あれは資源研の人たちも手伝ったりしていたはずですよ。例えば、阪口先生なんかもよく話をしますが、渡良瀬川の調査でレンガを投じていたとか。

佐藤 台風でどれだけ大水が出て、そのレンガが流れていくとか。

井上 そうそう。それにどれだけレンガが磨耗していくのか、そういう調査ですよ。

佐藤 井上さんは川に潜ったほうじゃないですか？

井上 それはもっと前の先輩方ですよ。

清水 三井先生は旧制の学位を取得されたのです。多田先生などが三井先生に「学位を取れ」と言われたのではないかと思うんですね。

井上 同じくその時に申請して取った人が浅井先生です。

佐藤 三井先生が学位論文を書いていらっしゃる頃、飯塚さんをご親戚になられていたのですか？

飯塚 私が結婚したのは昭和33(1958)年ですから、三井先生が学位を取得される前です。

佐藤 三井先生が学位論文を執筆している頃をご存じでしたか？

飯塚 いや、知りませんでした。

佐藤 大関さんはどうですか？

大関 河床変動の図などはグラフ用紙に描かされましたね。一度、描いた図を「もう少しきちんと清書してくれ」と頼まれて手伝いましたね。

佐藤 当時は現在のように複写機がないから、3部作成するのに手分けして文章を一生懸命に清書したとか。

井上 昔はそうだったでしょう。例えば、富山へ行って県庁から5日間の約束で資料を借りてくると、その5日間ずっと毎日写しをやった。何せ

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

コピー機がないからね。

飯塚 三井先生は筆まめで書くのも速かったですよ。

清水 読みやすくて、とてもきれいな字で書かれましたね。

井上 当時と今とでは学生の気質がかなり違うかもしれないですね。最近の学生は資料がなければ駄目と必ず言ってくるけれど、当時は自分たちで資料を探すとか、そういうことをみんなでやってね。昨今の学生の気質は違うなど、いつも思いますよ。また三井先生の面白いところは、山でもどこでもさっき触れたように現場が大好きなのですね。ただ一つ嫌いなのが蛇。蛇は大嫌い。「ぎゃっ」と逃げ回る(笑)。そこに蛇がいると言っただけで、もうそこを通らない。あれほど現場好きな人なのに珍しいなと思った。ある時、現地調査の合間にウナギ釣りをやっていたわけですよ。それを見て先生は怒るのだけれど、宿へ帰っている一番に釣ったウナギを食べるのは三井先生なんだよね(笑)。ウナギ同様の長い蛇が嫌いなはずだったのにね。田名部に行っても、それから恐山の宇曽利湖に行っても。

佐藤 宇曽利湖の辺りにはたくさん蛇が居るでしょう。

井上 いますよ、現場が好きな人なのに蛇が嫌いだって我々は驚いたものだね(笑)。

大関 それにその驚き方が一様でないよね。資源研で学生が何かへましそうになると、でかい声で「うわっ、ぶっ壊したらどうするんだ」と。とにかく前に「うわっ」が入るわけ。

井上 すごいです。あれにはみんな驚きますよ。

大関 「先生に『うわっ』と言われただけで器具を落っこしちゃうよ」って、私なんか言ったものですけどね(笑)。

井上 現場が好きな人だったことは確かですね。例えば、現地調査が終わると、船で船着き場まで戻る時に(両腕を上げて)踊りを踊っているみたいな格好をして歌を歌ってね。草津の酸性河川の調査でもね。

佐藤 ではあの品木ダムの頃ですか？

井上 あれの竣工前ですね。まだあそこは県管

轄で建設省に移管する前の調査だった。あの頃、品木ダムの模型を色々作って、建設省で模型を見せてそこに水を流してみたりしていました。

佐藤 現在では草津温泉に国交省の工事事務所がありますね。

井上 今では渋川の石灰を使わないで下仁田の石灰岩だけを中和目的で流すということをやっていますけれどね。ついこの間、学生を連れて行ってきました。あの辺も三井先生は何度も調査をされていました。湯畑からね。

佐藤 吾妻山系の酸性河川の調査を三井先生がしたのもその頃でしょうね。

それでは少し話題を変えましょう。皆さん、ご承知のように三井先生は法政大学の中でいくつかの役職を務められていまして、50歳前後からはとても忙しい立場だったのではないかなと思うのです。先生の経歴からも分かりますように、僕の記憶にあるのは最初に大学院議長を務めたことです。その後、文学部長に就かれ、それからしばらくおいて常任理事でしょうか？ この3つだけは記憶にありまして、その辺でもし皆さんの中で何かお話がありましたら。井上さんはどうですか？

井上 その頃のことになると、あまり分かりないうです。

佐藤 井上さんが本学へ着任した頃には、三井先生は何かの要職に就かれていたのではないですか？

井上 もう常任理事は辞めていたと思いましたね。法政大学の野球部長は務めていたのかな？

佐藤 その野球部長は昭和49(1974)年から定年退職するまでの計18年間務めていましたね。研究・調査という面では、タクラマカン沙漠の調査もあったでしょうけれど、少なくとも結構、その頃も忙しかったですね。飯塚さんはご親戚ゆえに傍で見ていて、三井先生が学内の多くの役回りで忙しいとか、それと関わるような一面はありませんでしたか？

飯塚 自宅で会うことはそれほどありませんでした。

佐藤 だけども自宅が近いから、ちょくちょく行くとかは？

飯塚 家内は子供を連れてよく行っていましたね。

佐藤 清水さんは外から見ていてどうだったのですか？

清水 ちょうど大学紛争の頃、三井先生は学部長だったですね。私は非常勤でしたから講義がなくて逆に楽だったですけど、大学へ書類を出す用事があって、バリケードの中へ入らなければならなくて何回か入ったのです。役付きの先生方は校内へ入れませんから、確か三井先生は九段の方に部屋を1つ確保して、事務を執っていたと思うのです。その頃、先生にしてはちょっと弱気というか、「きついよ」と口にはされていたことが記憶としてありますね。私はずっと非常勤を務めさせて頂きつつ、とても心配していました。

佐藤 学部長を務めていたから学生から吊り上げられる対象になるわけですからね。

清水 ですから、大学にあまり近づけないとおっしゃっていましたね。

佐藤 確かに学内が非常に大変な時期でありまして、先生方によっては体力的にまいってしまい役回りの任期を満了できないわけですけど、三井先生は学部長も、大学院議長も全うされたのですよね。

井上 それはすごいですけれど、ストレスで胃を壊されましたね。確かその時、四ツ谷の胃腸病院に入院されました。一見、豪放磊落という感じがするのだけれど、なかなか要職に就いてしまうと色々な人が居ますからね。あの頃、法政大学の多摩移転問題もあり、大分、心労が重なったのではないかなという感じはします。ただ、三井先生は、身体が頑丈であったことは間違いないですよ。

佐藤 常任理事を務めたタイミングが、多摩移転問題が浮上してきた頃ですかね？

井上 その当時のことを知っている学内の先生方は、三井先生じゃなきゃもたないと言っていましたね。

飯塚 身体はあまり大きくないですけど、とても丈夫でしたね(笑)。あの頃、胃腸病院に入院したと聞いて本当に驚きました。

佐藤 「私は風邪も引いたことがないよ」と、よ

く口にしていたくらいですから。でも自宅の机の下には電熱器みたいなものを置いていましたね。足元が冷えないように、そういう点でとても健康に注意を払っていましたね。

井上 冬は暖かい帽子を被るとか、そういう事には気をつけていた。それは先生なのか、奥さんなのか、よく分からないけれど。

佐藤 僕が大学院の頃にはそろそろ資源研を閉鎖する話題が出てきた。そこで三井先生は書物を受け入れるために、ご自分の家を改築なさって、仕事部屋を一つ増築されました。そこに机を数脚置いて、僕はアルバイトでそこに通ったのです。その時にもちゃんと机の下に例の電熱器を置いてあり、足を暖めて絶対に風邪を引かないように気を遣っていました。だから、非常に用心深い方であることは見ていて分かりましたね。

もう1つ、先ほども出ましたタクラマカン沙漠の話は大関さんが非常に関わっていて、異国の地で先生の人となり垣間見たのではないかなと思いますけれど、あれは何年間実施したのですでしたか？

大関 2年間でしたね。夏休みを活用して。現地だって暑いわけですよ。もう沙漠は50℃近くになるでしょう。それで体調が変になった人たちも出たのですよ。

佐藤 タクラマカン沙漠の調査は、何せ相手が中国ですから、あの頃の中国はどうだったのですか？

大関 中国とのこの話のきっかけは、日本山岳会がナムチャバルワに登るため、中国の登山協会とか探検協会と折衝を始めた事です。それが今から22～23年前だったな。その時、折衝に行った日本山岳会の会員が、中国探検協会から「一つ話があるから乗らないか？」と声をかけられた。それがタクラマカン沙漠の横断という話だった。徒歩で横断するのは世界で初めてだからやりませんか、しかも未開放地域に入れるのだからロイヤリティーをよこせと言うわけです。

日本山岳会は山のほうですから、タクラマカン沙漠の徒歩横断については日本に帰国してから何処かに声をかけてみよう。法政大学地理学科出身でワングル部のOBに藤井正彦という人が居まし

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

て、彼が日本山岳会の会員なのです。彼が当時のワンゲル部長であった井坂義雄先生にこの話しを持って行った。それで井坂さんは三井先生に、地理学科とジョイントして何かできないかみたいな話になった。それで三井先生が私に声をかけて、おまえのノウハウを活用したいと言う訳です。私は登山でヒマラヤへ何度も行っていましたから、

しかしその後、例の天安門事件が起きてこの話は一度、潰れるのです。でもまたその後に中国側から声が掛かってきたのです。「じゃあ」ということで向こうと折衝したら、高額なロイヤリティーを請求された。

とにかく隣国の日本から行くにしても、渡航費や機材や諸々かかる。何度かの折衝の中で、日本円に換算して千数百万円、とにかく捻出しなければいけないことになったわけです。平成3(1991)年でしたが、その頃はとにかくどの大学でも探検だとか、やれ何だといったってお金は集まらないですよ。それで「法政大学は何もやらないじゃないか」と三井先生に随分ハツパをかけたのです。中国側が最初に提示したのは、日本円に換算して千数百万円だった。とてもじゃないけど出せない。それでも1千万円ほどのお金を何とか捻出できた。

その後、2期目を遂行することになって、もう地理学科とワンゲル部ではどうしようもないから、大学当局に寄附行為をしたいとお願いした。それが受理されて費用を集めたのだけれど、それでも足らなくて個人負担で幾ら出すのかと、とにかく行きたい人は出そうと。学生はそんなに金が無いから、それ以外の方は50万や60万出すのは当たり前だろうと。それでも三井先生や井坂先生も足りない分をかなり負担されたのです。それで何とか費用を工面できて2次調査も実施できたのです。

三井先生が日本側の総隊長という話になりましたので、中国へ行って科学院の人たちと随分と折衝されました。とくにタクラマカン沙漠の場合、徒歩横断した前例は無いというわけですから面白いぞと。その代わり金を出せということが1つ。

それにもう1つ。NHKの「シルクロード」製作

に中国科学院とか中国探検協会が絡んでいるのです。NHKは「シルクロード」の絵を撮るためにとても金を使っているのです。パジェロだとかランクルを中国側に差し上げているのです。それが向こうの頭にあるわけで、「日本の法政大学なのだから、車5台や6台ぐらい無償でくれ」と言われた。冗談じゃない。結局、最終的には向こうの車をレンタルすることで決着したのですけれど、そこへ行き着くまでが大変だったです。

だから、そんな先例をつけたNHKはとんでもないですよ。「シルクロード」のディレクターが日本山岳会に所属しているのです。つい先日も会って、「あなたがそんなことをやるから後で行く人間にとってはとても困っちゃう」とつい愚痴を言いましたよ。

我々が行った時も、中国は二股をかけているんだよね。ロイヤリティーを余計に出すほうを優先というわけで、法政大学にも声をかけるけれど他にも声をかけている。民間放送にも声をかけてそれにTBSが乗ったのです。確か平成2(1990)年1月2日だか3日にタクラマカンの徒歩横断ということを放映したのです。それを僕らは見たので、もうあんなことをやったのでは駄目だと。でもせっかくここまできたのだから横断なんかやらなくたって、中国側が何を狙っているのか、もう少し話を煮詰めたのです。要するに、科学的な研究であるなら話はまた別という形で動けば、法政大学としても名を上げることができるのではないのかとなったわけです。結局、ただの探検横断ではなくて「学術探検調査」という名目にしたのです。その折衝の過程で三井先生は中国側の人間と話をまとめるのだけれど、そのような点ではかなり苦労されたと思いますよ。

佐藤 現地への滞在は1ヵ月ぐらいですか。

大関 第1次が1ヵ月で、第2次はもっと長かったのです。色々話を詰めていく過程で、中国側はタクラマカン沙漠の開発をしたいのが分かってきましたね。あそこは原子力の施設もあるし、油田があることも分かっている。沙漠の周辺にもっと漢民族を入れて農耕をさせたいということも、中国政府の意向としてあるわけです。それ

には水が不可欠であり、法政大学の三井さんは水が専門だからということもあって、それで「沙漠・水・人間」というタイトルになったわけです。

しかし、水収支を云々するのであれば、ケリヤ河源流部の氷河から見なかったら話にならないだろうと、でもケリヤ河というのは途中がすごい横谷なのです。そこは人跡未踏の地で何か事故でもあったら困るから通らせられないと、ケリヤ河の支流の方から回って、すなわちクンルン山脈中の盆地にあるアシュククラを回って行けば良いと考えたわけです。ケリヤ河源流域のあまり良い地図でないにせよ、中国側はそれを持っているのに、こちらに見せないのですよ。5万分の1の地形図を絶対出さない。仕方がないから夜、同行した学生をたたき起こして、トレーシングペーパーにこっそりと写しとりましたね。

ケリヤ河の源流部にはアクスムズターグという7,000m近い山があり、そこが水源なのです。そこまで行こうと折衝したのですが、結局、果たせなかった。私がいかにうるさく言ったものだから、もう交渉の段階で中国側の連中から、あいつは危険人物だとレッテルを張られたみたいですね。

佐藤 考えてみるとあの時期は三井先生の退職間際なのです。とてもじゃないけど、あんな過酷な所へなんか私ならば行けないな。

大関 私はそれなりに体力的に余裕があったのですけれど、実際、三井先生はタクラマカンから帰国して2年ぐらい経過してから体力がかなり落ちましたね。それはもう皆さんご存じだろうと思うのですが、その後、何度も入退院を繰り返されていたようですから。

佐藤 井上先生は、タクラマカン沙漠への参画を要請されなかったですか。

井上 それは全然なくて(笑)。ただ、水を調査するというので小寺浩二君に「蒸留水をたくさん持って行きなさい」と、それだけは伝えましたね。

佐藤 ああいう過酷な場所へ行くのは大変ですよ。今でこそ少しは便利になったのでしょうか。

大関 我々が帰国してから1年ぐらい後に西域

(セイイキ)へは、中国政府が認可したエージェンツの旅行の場合のみ、西域南道の道路を通れることになったのです。

でもとても良い経験をしましたし、ワングル部員の真貝伸子(経済学部)という女子学生は、その時、世界で最初にアシュククラに入った、ただ1人の女性ですからね。それを中国側ではすごく評価しているのです。

佐藤 三井先生はああいうところへ行っても、食事なんか困った様子はなかったですか？

大関 いや、下痢はしたと思いますよ。水でも下痢するし、現地の飯でもそうだったのではないですか。

佐藤 だけど三井先生は好き嫌いのないほうでしょう。

大関 でもあれだけの気温変化の中で、それも毎日、毎日でしょう。普通の人間でもなかなか耐えられないですよ。

佐藤 夜は0℃近くに下がり、日中は40℃を超えたりするというからね。

大関 私が行った所だって、高いほうへ行けば、標高5,000mを超えるわけです。毎日、夜は雪が降り、日中になるとグリーンと気温が上がって、本当に日較差が40何℃です。ですから、向こうの人間でもまいっちゃった。中国科学院の人間が2人、僕らと一緒に行動していたのですが、最後には音を上げちゃった。高度障害と、色々なストレスからくる障害でしょうね。それが顔に出ちゃって、唇は割れるわ、顔ははれちゃうわ、食べ物喉を通らないわと。このままでは死んじゃうと言出した。

井上 それにしても三井先生は丈夫だね。

大関 ラクダにも乗ったくらいだからね。

井上 ラクダに乗っていた写真は見せて頂いた。

佐藤 ところで先ほど出たように、昭和49(1974)年から退職されるまでの18年間、法政大学体育会の野球部長を務められたのですよね。この辺に関しては皆さんどうですか？飯塚さんなんかもそれはご存じでしたか？

飯塚 それには私も驚いた。野球の「ヤ」の字も

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

知らない方ですのにね(笑)。つい最近まで様々な会合に顔を出していましたね。

佐藤 野球関係の？

飯塚 そうです。また神宮球場の試合にも行くのです。その努力たるやすごいものですね。最後まで野球はそれほど知らなかった気がしますね(笑)。また就任当初は江川卓選手の時代でしたね。

大関 皆さんも三井先生に関する色々な野球のエピソードを知っていると思いますけれど、その一つに、右打者が打ってファーストへ走りますよね。それよりもサードに走ったほうが近いじゃないかと(笑)。右バッターの場合、確かに一步違う。だから何で遠いファーストへ行くんだという有名な話があって(笑)。

佐藤 野球のルールを知らなかったのでしょうかね。法政大学野球部の90年史があって、そこに先生が寄稿されているのを読んだら、18年間務めて16回優勝したと書いてありました。その後、経営学部の中井一孝先生が野球部長を引き継いだのです。

飯塚 野球音痴だから、我々はそんなに長く続かないだろうと思っていました。でもやっぱり人柄ですかね。

佐藤 そういう点で井上さんは資源研あたりからずっと傍で見ていて、三井先生の口からスポーツの「ス」くらいは出ましたか？

井上 まあ、三井先生には無理ですね(笑)。現地調査は達者だけど、スポーツは…。さっきの大関さんの話で山登りはどうかと言えば、調査だったら登っちゃうの。でも登山ならば、きっと嫌だろうね。おそらく行かないでしょう。

佐藤 野球部長を引き継いだ時が、タイミング的に江川選手や現在の監督の金光興二さんなどが選手の時だったのです。いわゆる「花の49年組」で、とても良い思い出をされたのですよ。あの頃は神宮球場にも大観衆が入ったしね。地理学科の学生にも野球部員がいましたから、現地研究などに彼らが参加すると、試合中のベンチで三井先生がどういう様子なのかを、彼ら部員が真似するのです(笑)。これがまた仕草の特徴を上手く捉えているんですよ。

井上 野球部員が？

佐藤 ええ。三井部長はベンチの中でどうやっているのか、宿での余興の際に真似するんです(笑)。ただ、先生は僕に「試合中にいつ拍手をすれば良いのか、わからないから困る」と言っていましたね。つまり、いつ自チームがピンチで難しい顔をし、いつチャンスで手を叩くのか、それが分からないからとても苦労したみたいですね。だから周りをみてワントempo遅れて手を叩いていましたね(笑)。それから、ピッチャーが投げてバッターが打つと、目はボールを追いかけるじゃないですか。外野の飛球をね。あの広い外野をわずか3人でしか守っていないのに、何でわざわざそこへ打つのだろうかと言うんですよ(笑)。「あんなに外野が広いのに、野手のいるところに打たなくて良いのに？」と。先生は飛球ばかり目で追いかけているじゃないですか。だから打球が飛んでいる間に野手が走っているのを、当初、理解できなかったようですね。「不思議だな？」と口にしていましたからね。

井上 三井先生らしいね(笑)。間々「君ね、サイクルヒットって知っているのかい？」と口にするものだから、僕は友人たちに「『知らない』と言っとけよ」と(笑)。あまりに自慢気に言うものだから、それがまたおかしくてね。

佐藤 三井先生はルールなどをあまり知らないから、そういう点ではストレスが溜まらない(笑)。

井上 先生は恥ずかしいということが余りない方だから、すごく良いですよ。

佐藤 「部長先生、こちらへ来て挨拶を」と、そればかりしょっちゅうやらされるとぼやいていましたけれどね。全日本大学野球連盟の評議員なども務めていたようですよ。

飯塚 野球部関連の会合だというと、いそいそと喜んで行っていました。

佐藤 その時、奥さんはどのように思っていたのでしょうかね(笑)。

飯塚 もう仕方がないと。

井上 若い時から母子家庭みたいなものだったでしょうね。奥さんにちらっと聞いたことがありますから。

佐藤 では三井先生のご家庭のことをちょっと、プライバシーに差し障りの無い範囲で、一番上の子供さんが豊さんで、下が双子の女の子さんでしたね。僕が三井先生の自宅にアルバイトで通っていた頃は、下の双子の子供さんは小学校の五年生か六年生だったですね。2人とも同じ姿・格好をしていたようですけれども、最初、私は双子だって知らなかった。おやつの時間にお茶を持ってきたくれた方に、「あなたは和子さんですよ?」。「違います、富美子です」と(笑)。ほどなくお茶を下げに来てくれた方に「富美子さんでしたね」。「違います、和子です」と。私はからかわれているようで、どちらがどうなのか、まったく分からなかったですね(笑)。この間、ご葬儀の際に久しぶりにお会いしましたが、もう大きなお子さんもいましてね。さっき井上さんが母子家庭みたいだったと申されましたけれど、実際、飯塚さん、三井先生はどうだったのですか?

飯塚 先生は家庭のことは何もしない(笑)。

大関 ある時、私に「君、双子っていうのは面白いんだよね」とつくづく口にされることがありました。「容姿はそっくりだけど、性格はまるっきり違うよ。本当に一卵性双生児なのか?」と(笑)。三井先生がお亡くなりになる前に富美子さんとは何度か連絡をとったりしたのですけれど、何でそうなかったかというのは、三井先生をお見舞いしなくちゃいけないと思って電話連絡をしても、誰も電話に出られないわけです。もう毎日のように電話をかけましたね。ある日、珍しく受話器がとられて電話が繋がった、それが実家に立ち寄った富美子さんだったのです。お話を聞いたら、実は先生の具合が悪くて入院しているという訳です。病院の場所を聞いてすぐ飛んで行った。そうしたら先生は車椅子に座って、キョトンとしている。ナースセンターのすぐ目の前の部屋にいらっしたのです。先生も驚かれて、「どうした?」と言うから、「いや、『先生がどうしているのか?』と気になっている方が居ますので」と。そしたら「誰だ?」と言うものだから、「史学の伊藤玄三先生と井坂先生ですよ」と。それで先生方にその後に

連絡を入れさせてもらった次第です。それから先生は別の介護施設(西武新宿線・新井薬師駅近く)に移られて、そこに奥様も一緒に入られていました。そこにもこの3月27日に見舞いに行きました。その時には飯塚先生がいらっしやっていましたね。

飯塚 (うなずく)

大関 先生は別にどこかが悪いというようには見えなかったし、奥さんも一緒にその施設に入っていたので「これだったら良かったな」と思いながら「では、失礼します」とその玄関を出たのです。でもそれから5日後に亡くなられましたね。

佐藤 今、大関さんから先生の晩年のお話が出ましたけど、その前に退職なさってからのご様子どうでしたか? 私は時々、三井先生が大学へ来たり、神宮球場へ来たりするとお会いしていましたし、また練馬区の緑化委員も先生が務められていて、そういう時にもお会いしたことがあります。

飯塚 平成18(2006)年から練馬区で新年賀詞交換会をやっており、区長が関係の人たちを招いての恒例の行事になっています。その時には必ず出席していました。散会後にはいつも私と一緒に帰っていましたが、それも昨年が最後となりました。あとは法政大学の練馬支部の会があります。

佐藤 校友会のですね。

飯塚 先生はその顧問でしたから毎年出ていました。平成13(2001)年には『我が教授生活を顧みて』という講演をしています。

佐藤 それはどこかで印刷になっていますか?

飯塚 印刷にはなっていないと思います。ちょうど去年の新年会の日に先生が入院されて、その日の席上、私が「きょう入院しましたので出席できません」と練馬支部の皆さんに伝えました。

佐藤 三井先生は大学を退かれてから色々な会合にまめに顔を出しておられたのですね。そういう様子が頭にあったものですから、大関さんから連絡を頂いて驚いたのです。井上さんとも時々学内などで会った際に三井先生のお話をしましたけれど、「先生だから元気じゃない」なんて、だから

座談会「三井嘉都夫先生を偲んで」

井上さんも先生の訃報を耳にしてびっくりなさったでしょう？

井上 そうですね。大関さんからの話で「えっ」という感じだったですね。

大関 とにかく私は電話を何度もして、偶然ながら富美子さんから話を聞いて、当初の入院先であった練馬・順天堂病院に見舞いに行ってみたら、意外に元気な様子だったので安堵したのですが、ただその時、先生は入れ歯を外しちゃって、でも例の調子で鉄砲玉みたいにしゃべるわけです。せいぜい半分くらい聞き分けられるか否かでした。でも「うれしかった」と盛んに言われてね。

井上 「かっぱえびせん」というあだ名をつけたのは、大関さんでしたよね。

大関 そうです(笑)。

飯塚 また、先ほどの大関さんが介護施設の方に見舞ってくれましたのは三井先生の亡くなるちょっと前の3月27日です。先生はもう大関さんを離さなかったんですね。

大関 その前の順天堂病院に入院していた時も離してくれなかったですね。

佐藤 息子さんの豊さんが海外勤務だったでしょう？

飯塚 今は中国の寧波です。

佐藤 その前はイギリスにいましたね。

飯塚 はい。

佐藤 僕の頭には、アメリカにも滞在された記憶がありますね。

飯塚 そうそう。豊さんは、先生が病気になる前にご両親をロンドンへ呼びましたから、とても親孝行でしたよ。

佐藤 よく遠方まで長旅で行かれましたね。

飯塚 奥さんは車椅子で行ったのですよ。

佐藤 イギリスへ行かれたことを、とても喜んでお話しになっていましたね。

飯塚 ですから、家庭ではよくしてもらっているんですよ。

井上 ご兄妹はすごく仲が良くて、豊さんと双子の娘さん3人で、年に1度はバイオリンとか必ず演奏することになっていましたね。大したものだなと思います。三井先生も喜んでいましたから

ね。

飯塚 先生は歌が好きですからね。

佐藤 利根の河原の枯れススキの歌(笑)。あれはよく聞かされたな。正しいタイトルは何でしたかな？「俺は河原の枯れススキ」というやつね(笑)。歌はよく歌いましたね。それから先生の所へは正月によく集まれる。佐々木茂さんなんかもね。

井上 そうそう、昌平の仲間が正月の2日に集まるんです。

飯塚 それはずっと続いたんですよ。2日の11時ぐらいから、入れ替わり立ち代りで夜までですから。先生も飲むんですから、よく続くと思いました。

井上 すごいですよね。

飯塚 それがずっと長い間、続いたんです。料理は奥さんが全部つくりましたね。年をとってからは止めましたけれど、今年の正月は先ほどの新井薬師のケアハウスから2人を一時帰宅で自宅へ連れてきて、家族で新年のお祝いをしました。

佐藤 今、お孫さんは何人ですか？

飯塚 4人ですね。

佐藤 そろそろ時間も残り少なくなりました。最後に皆さん方から三井先生への惜別の言葉を頂ければ…。では井上さんから、どうぞ。

井上 三井先生はあの世に逝かれても結構みなさんと上手くやる人ですから、先生より先にあの世に逝った人たちも楽しんでますよ。

佐藤 確かに事を荒らげたりするようなタイプじゃないですね。丸く、丸くという感じだったから。

井上 うーんと丸く治めるという人ですからね。

飯塚 本当に素晴らしい家庭をつくっていました。敬服するばかりです。

井上 そうですね。

佐藤 大関さん、この会を閉めるに当たりましてどうですか？

大関 とにかく私にとって、先生の最期が余りにもあつけなかった。まだまだ長生きして頂きた

かったですね。

佐藤 清水さんはどうですか？

清水 何て言ったら良いのでしょうかね。今の自分があるのは三井先生のおかげの部分がありますね。

佐藤 清水さんはもう高校生の時代からですかね。

清水 それと『ボルガ』での話ではありませんけど、学問の進め方とか人間との付き合い方とか、そういう類のことを多く教えて頂いたように思いますね。ですから私学出の私みたいな人間が何とかやっていけた。その部分では三井先生のお陰かなとつくづく思いますね。亡くなられたというお話を大関さんから聞いた時はすごいショックでしたね。ああいう先生は亡くならない、ずっと元気でいらっしゃるということが頭の中にありましたからね。『ありがとうございます』ということ以外の言葉がありませんね。

佐藤 先ほど皆さんが紹介したように、三井先生はとても丈夫で、余り病氣なされたのを見たことがない。そういう印象が強いものですし、加えて大関さんから電話を頂いたのが4月1日だった。だから嘘でも言っているのではないかと思っ

たほどでした。

ついこの間まで「私の席はここに決まっているんだよ」と神宮球場に足を運んでくれていたのに、神宮球場の職員までそう口にしていましたからね。僕も何度か車で神宮からの帰りお送りしましたけれど、元気だっただけにとても残念でありません。

色々な人との間で軋轢を解消して、上手にまとめていく調和型の先生だったですね。ある方が言っていましたけれど、専任教員に採用して頂くのに当人が先方へ面接に行く前に、三井先生がその学校長にお会いしてそれとなくレールを敷いており、当人は自分の力で採用されたように思っているけど、きちんとそう言う所で気を遣ってくれたようですね。まさしく気遣いの先生でしたね。

清水 他人から見えないところでご苦労されて、面倒を診ておられた方ですね。

佐藤 先ほど井上さんが申されたように、あの世でも三井先生はきっと皆さん方と楽しく過ごされていらっしゃると思いますよね。合掌。

皆さん、本日は誠にありがとうございました。またご多忙の中、ご苦労さまでした。

——了——